

司式：佃 雅之
奏楽：堀口恵美

前奏：「天にいます我らの父よ」(G. ベーム)

招詞：眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。(エフェ5:14)

讃美歌：7「ほめたたえよ、力強き主」

交読詩編 34 篇

(アルファベットによる詩)

- 01 【ダビデの詩。ダビデがアビメレクの前で狂気の人を装い、追放されたときに。】
02 どのようなときも、わたしは主をたたえ/わたしの口は絶えることなく賛美を歌う。
03 わたしの魂は主を賛美する。貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え。
34:4 わたしと共に主をたたえよ。ひとつになって御名をあがめよう。
05 わたしは主に求め/主は答えてくださった。脅かすものから常に救い出してください。
06 主を仰ぎ見る人は光と輝き/辱めに顔を伏せることはない。
07 この貧しい人が呼び求める声を主は聞き/苦難から常に救ってください。
08 主の使いはその周りに陣を敷き/主を畏れる人を守り助けてくださった。
09 味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。
10 主の聖なる人々よ、主を畏れ敬え。主を畏れる人には何も欠けることがない。
11 若獅子は獲物がなくて飢えても/主に求める人には良いものの欠けることがない。
12 子らよ、わたしに聞き従え。主を畏れることを教えよう。
13 喜びをもって生き/長生きして幸いを見ようと望む者は
14 舌を悪から/唇を偽りの言葉から遠ざけ
15 悪を避け、善を行い/平和を求め、追い求めよ。
16 主は、従う人に目を注ぎ/助けを求める叫びに耳を傾けてくださる。
17 主は悪を行う者に御顔を向け/その名の記念を地上から絶たれる。
18 主は助けを求める人の叫びを聞き/苦難から常に彼らを助け出される。
19 主は打ち砕かれた心に近くなり/悔いる霊を救ってください。
20 主に従う人には災いが重なるが/主はそのすべてから救い出し
21 骨の一本も損なわれることのないように/彼を守ってください。
22 主に逆らう者は災いに遭えば命を失ひ/主に従う人を憎む者は罪に定められる。
23 主はその僕の魂を贖ってください。主を避けどころとする人は/罪に定められることがない。

朗読聖書①レビ記 19:9-18

- 09 穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。
10 ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。
11 あなたたちは盗んではならない。うそをついてはならない。互いに欺いてはならない。
12 わたしの名を用いて偽り誓ってはならない。それによってあなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。
13 あなたは隣人を虐げてはならない。奪い取ってはならない。雇い人の労賃の支払いを翌朝まで延ばしてはならない。
14 耳の聞こえぬ者を悪く言ったり、目の見えぬ者の前に障害物を置いてはならない。あなたの神を畏れなさい。わたしは主である。

- 15 あなたたちは不正な裁判をしてはならない。あなたは弱い者を偏ってかばったり、力ある者におもねってはならない。同胞を正しく裁きなさい。
16 民の間で中傷をしたり、隣人の生命にかかわる偽証をしてはならない。わたしは主である。
17 心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない。
18 復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。

朗読聖書②ヨハネによる福音書 13:31-35

◆新しい掟

- 31 さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。
32 神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。
33 子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行く所にあなたたちは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言うておく。
34 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。
35 互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

祈祷

慈愛に満ち給う全能の父なる神さま、あなたの尊い御名を心から褒め称えます。私たちは今日、あなたに感謝と賛美に満ちた礼拝を献げるために、この礼拝堂に、またライブ配信によって集められました。私たちがあなたの御声に導かれ、あなたの深い憐れみの中に生かされていることを覚え、深く感謝致します。あなたの導きと憐れみがなければ、私たちは罪を犯し続け、その罪の中に留まっていることしかできない者たちであります。そのような私たちをあなたは目に留めてくださり、その日その時に必要な御言葉を与えてくださり、悪の中から助け出し、悪の力から解き放ってくださいましたことを覚えます。

しかし真に、私たちは頑なな者たちであります。あなたの御心を聞き、あなたの御言葉に聞き従いたいと願いつつも、何度耳を塞ぎ、あなたに背を向けたことでしょうか。主よ、どうか私たちをお赦しください。私たちがこの礼拝において、あなたの御前で心砕かれて謙遜な者となり、あなたに仕える者と至らしめてくださいますよう切にお願い致します。罪を告白し、新たな決意を持って改めて信仰を言い表すことができるようにしてください。主よ、どうかあなたが私たちの内に留まってくださり、私たちの魂に語りかけ、命の力をくださるとともに、私たちが歩むべき道を歩むことができるようにしてください。

平和の主よ、世界にはなお争いと分断、悲しみと不正が満ちています。平和を求めるすべての人が、また弱い者たちが踏み躪られることのないよう、あなたの正義を行わせてください。そしてこの世の悪の力に対して、私たちがどのようにあるべきか、どのように生きるべきかをお示しください。私たちがあなたの平和を伝える使者として、いつもあなたと共に働くことができるようにしてください。

主よ、願いつつも、ここに集うことのできない兄弟姉妹たちに、あなたの御手を置いてください。あなたの温かな御手が一人ひとりの慰めとなり、導きとなりますよう、あなたの愛が注がれますように。今、病の中にある友、心に重荷を負う友、働きの場で苦闘している友がおります。また、ここに集っています私たちの心の内にも様々な思い煩いがあります。しかし、あなたは私たちの思いに勝って、私たちの悩みをすべて知っていてくださいます。私たちに、すべてをあなたに委ねることができる信仰をお与えください。私たちの教会が、主イエスの憐れみを映し出す群れとして整えられ、互いに仕え合い、あなたの愛をこの地に証しすることができますようにと祈ります。

主よ、今日あなたがこの教会に説教者を与えてくださいましたことを感謝致します。水谷勤牧師をあなたの聖霊によって豊かに満たし、あなたの口として用いて御国の消息をお語りください。聞く私たちにも聖霊を与え、取次がれた御言葉が私たちの心の中に深く滲み通りますように。私たちがその言葉を受け入れ、信じ、喜び、慰められますように。御言葉によってあなたの教えが真実であることを味わい知ることができますように、あなたの助けを求めます。

これらの祈りを、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

讃美歌55「人となりたる神のこは」

説教 「進み行く主の教会の交わり」

水谷 勤

今朝、信濃町教会の皆さまと共にこの礼拝に集い、主に感謝の礼拝と賛美を献げることができますことを、心より主に感謝しています。

今日の聖書の箇所では、主イエスが弟子たちに言われました。「**わたしがあなた方を愛したように、互いに愛しなさい**」。弟子たちに言われたということを考えますと、これは私たち教会に、そして互いの交わりについて言われていて、改めて考えさせられる御言葉ではないでしょうか。

先日、以前私がいましたある教会から、一年の様子を記した教会報が送られてきました。コロナのパンデミック以来ひかえていた各部の集まりを、ようやく定期的に行うようになったという風に書いてあるのを目にしました。その教会の場合は、おそらくコロナ前の状況に戻るのには5年かかったということだと思います。何かもう過ぎ去ったことのようにも思えますけれども、コロナによって、おそらくすべての教会が多かれ少なかれ、教会の交わりを縮小せざるを得なかったという、これまでにない経験をしたのだと思います。そして単に以前に戻ったということだけではなくて、そこから何か私たちが考え、また深められたものが、新しい洞察があったかどうか。そうしたことを考えますと、その一つに、改めて「**教会における互いの交わりとは何であろうか**」、「**教会における交わりの本質**」ということについて見出す機会になったと思われまふ。

今日は改めて本日の聖書日課の箇所から御言葉を聞き、「**わたしがあなた方を愛したように、互いに愛しなさい**」という主イエスの教えが、今日を生きる私たちへの問いかけとして語りかけられていることを、共に見ていきたいと思ひます。

今日の聖書朗読の冒頭で、「さて、ユダが出て行くと、」と書かれています。直前の箇所では、いわゆる『最後の晩餐』の時が持たれ、そこで主は弟子の足を洗われ、そして主イエスは十字架のご受難に向かわれるという、一刻一刻が描写されるように伝えられている箇所です。いよいよその時が来た

ということを示す内容がこの箇所であることがわかります。主イエスの十字架の予告がなされ、その緊張の高まりを迎えて、「**今、あのユダは出て行った**」と、もはや逆戻りすることはできないという合図のような一言です。これはヨハネ福音書の特徴でありますけれど、主イエスは十字架に向かわれることにおいて決して受け身ではなく、大きな覚悟を持って自ら力強く「**さあ、行こう**」踏み出して行かれます。

今日の箇所では特に32節を見ますと、「**人の子に栄光をお与えになる**」という自覚を主が持たれて歩んでいかれています。「**栄光をお与えになる**」ということですから、「**復活という栄光が、その光輝きが、主イエスをいわば牽引するような信仰として、それを主が抱いておられる**」と伝えられていると言えます。そして教会の歴史の中で、初代の教会も、始まったばかりの教会も、これらのことを大切にしていたはずで、つまり一つには、やがて来られる主イエス、その光輝きに向かって歩んでいく信仰。そしてもう一つが、先ほど見た「**わたしがあなた方を愛したように、互いに愛し合いなさい**」という、信仰者の相互の隣人愛について、特に厳しい時代においては、なお教会が大切にしていた教えであると思ひます。

そう考えますと、この福音書から私たちは、この教会の隣人愛の問題が、決して表面的な倫理的な問題だけではなく、むしろこの教会の歩む終末的な歩みの中に置かれている観点から理解しなくてはならないのではないだろうか。つまり、「**栄光**」という言葉が差し示しているのは、それはやがて主が来られる時の完成の時を意味します。そこに向かって歩む教会の姿があり、教会の一步一步があり、私たちは教会を喜びの教会として主に差し出し献げるその役割を与えられている、ということができないのではないのでしょうか。終末に、その完成に向かう教会の責任を託され、そして私たちはその召しを受けているということであると思うのです。

現実的に、なぜこういうことが大事なのだろうかと考えますと、例えば私が属しています神学校では、神学生たちが学びを深めておりますが、献身の志を持って入ってくる神学生たち一人ひとり、異なる歩みでありますけれども、入学して入ってきます。一般論でありますけれども、必ずしも教会生活において順調な道筋を辿って神学校に入ってくる学生ばかりではなくて、むしろ、教会で躰いたり、教会の様々な事情で傷を負いつつ、むしろそういうところから神学校に入ってくる者もいます。彼らにとって聖書は教会について何と言っているのだろうか？という問いを持ち続けて神学を学びます。過去の経験が切実な動機となって、それゆえに「**教会を立て上げていきなさい**」という使命を改めて与えられて、教会に遣わされていきます。私自身も、どちらかといえばそういう後者の方であったように思ひます。実際の教会には課題が多く、決して完全な姿ではないわけですが、聖書から日々発見を与えられて目を開かれ、そして希望を与えられ続けて今日まで歩んできているように思ひます。

そういう中で、改めて教会を神さまに良きものとして終末に向けて日々準備し、教会をお献げするという思いが、なぜ大切なのでしょう。福音書には「**献げる**」という場面がいくつも出てきます。思い出した箇所から一つだけ触れますと、クリスマスの場面、教会学校で子供たちが演ずるクリスマス劇でありますけれども、三人の博士たちが、お生まれになった幼子主イエスに最上のものを差し出した。そしてそのことは、あのヘロデ王に対して「**否**」を突きつけるものであったことを聖書は記しています。彼らは最上のものを「**献げる**」ことを通してヘロデと決別して別の道を帰りました。

た。そのことを思い起こします。

私たちが教会を隣人愛で満ちた場所として終末に向けて備えるということとは、やがて来られる主に対して為すということであり、さらには、世の中の主イエスの示される愛と全く反対の、暴力に満ちる世に対して“否”を唱え、主の真理を示すその信仰告白を世に対して為す業であるということを中心に留めたいと思います。

「互いに愛し合いなさい」と主は言われました。ここで言われている「互いに愛し合いなさい」、隣人愛とは、具体的にどういうことを指して言われているのでしょうか。今日の旧約聖書の聖書朗読の箇所には、よく知られる御言葉がありました。「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」、レビ記 19 章 18 節の御言葉です。そこには、「自分と隣人は同じである」という考え方が根底にあり、そこには異邦人である寄留者や弱い者が含まれていることがわかります。そのことが記されていること自体、驚きであり、今日的な私たちの社会においても重要なことであると思います。

そしてヨハネ福音書に目を移しますと、今日の箇所では「自分自身と同じように」と言われてはおらず、主イエスが「わたしがあなたを愛したように」と言われています。ですから、「主イエスを思い起こすように」と言われています。特に直前において、主イエスが弟子の足を洗う場面があります。「模範を示した」(15 節)と言われているので、主イエスが実際に腰を折って、弟子たちよりも身を低くして弟子たちの足を洗われた、その姿が示されています。

隣人との関係において身を低くすることについて思い出したことがあります。神学校で神学生たちと一緒に本を読んでおりますが、神学者ボンヘッファーが教会で読まれるために著した『共に生きる生活』を皆で味わいながら読んでいます。この本のタイトルにありますように、キリスト者同士の交わりについて記されています。神学生たちは日頃、何気なく机を並べて同じ志を持って共に学んでいますが、それぞれの反応が新鮮でもあります。本の中には、時々読み手が“ドキッ”とするような一文に出会うこともあります。

著者はプロテスタント信仰の根幹である宗教改革の信仰を真剣に考えていて、その中でも「我々の救いと義は我々の外から来る、決して自分の内側にあるものではなく、また誇ることができるものでもなく、恵みとして外から与えられる」ということを常に念頭に置いたうえで、キリスト者のお互いの交わりの洞察を深めています。そして、こう言うのです。「自分の心の中にあるキリストは、兄弟の言葉におけるキリストよりも弱いのである」。つまり、自分が確かに捉えていると思っているキリストは、「救いと義は外から来る」ということに照らし合わせるならば、むしろ兄弟姉妹の言葉における自分に与えられる、そこから与えられるキリストの方がより確かなのだということです。これを聞いたときに神学生たちは、相手が、例えば牧師なら分かるけれど、お互い同士となると…と言って戸惑う学生もいます。また或る学生は小さな声で「謙遜」と呟きました。そのように揺さぶられながら、「隣人から自分へ来る恵みの流れ」というものを改めて意識する大切さに触れています。

教会における『交わり』とは何でしょうか。私たちの間に立たれる仲保者なるキリスト、そのお方に触れて、私たちの隣人から多くの恵みを受けていること、また与えられ続けられようとしていることを経験していくことではないでしょうか。仮に一時的に何かわだかまりがあったとしても、その相手からキリストの愛を受け取るという意味で、私たちはその交わりを諦めずに、むしろ大切にすることがあるのだと、主が腰を折って、身を低

くして弟子たちとの関係をさらに深く築かれたその姿が思い出されます。

神さまの時があり、御子を私たちに与えてくださったその神さまが、ましてや私たちに信仰者同士の和解の時も与えてくださる、そのことを信じているのだと思います。私自身も 20 年以上も経って、そのような和解を与えられたという経験があります。長く心に悶えていた教会の内部で起こったことですが、その事すつと落ちていく、そのような和解の経験をする出来事がありました。パウロとバルナバも激しく衝突しましたが、後の手紙によれば和解を与えられている、信仰者同士の関係もそのようであると聖書は私たちに伝えていると思うのです。

またそういう時が与えられる、そのように、お互いが通じ合うことが仲保者なるキリストによって与えられることを、どういう風に喻えることができるだろうかと思い巡らしたときに、ある状況を思い浮かべました。少し季節外れかもしれませんが、日本庭園などで池のそばにある「ししおどし」という装置です。竹筒に水が流れ込むように作っており、水がいっぱいになるとその重みで、それがテコのようになって、“カタン”と大きく動き水が流れ出る。その際には竹が石を強く打ち、“コーン”という音が響き渡る、そういう昔ながらの知恵によって造られた竹と水の装置ですが、“時が満ちる”、つまり水がそこに流れ込んで時が満ちる瞬間があつて、その竹がこちら側を傾いて、つまり勾配が逆になって、その時に響き渡る音と共に豊かな水がこちら側に流れ開く、一気に流れるというのを思うときに、私たちの隣人との関係においても、キリストがそこで何か事を起こされ、打たれる時に、大きく、その隣人から大きな恵みが流れ込むような時があると思うのです。それは短い期間を待つ時かもしれませんが、実に長い歳月を必要とするものかもしれませんが、確実に主がその時を用意され、そしてあの音の瞬間に不思議な仕方御業を顕してください、そのことを仲保者なるキリストに私たちは祈り求め、願い続けることができるのではないのでしょうか。

「わたしがあなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい。」「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」最後の箇所の「それによって…皆が知るようになる」というところを、最後に心に留めたいと思います。

“世の人々が、神が御子イエス・キリストをこの世に与えてくださったことを悟るようになる。”この福音書がおそらく声を大にして伝えていることだと思います。

私たちのこの世の中を思う時、世界においても国内においても、主イエスが示されたその愛と全く反対の方向に日々加速している状況に私たちは置かれているように思います。主はどのようにそれをご覧になっているのだろうか、果たして元にはもはや戻ることはできないのだろうか、そのようにさえ憂う時代にあって、今日私たちの教会に向けられたこの御言葉、つまり、私たち自身がこの教会の内の隣人愛に生かされる、そのようにしてこそ、神さまを“世の人々が知るようになる”と言うのです。そのようにしてこそ主が事を起こされ、恵みの業が開かれる。教会に託されたお互いへの愛、隣人愛、あの勾配が変わるように一気に神さまの側から世に恵みが流れ出ることを主の約束として、今日も信じ、祈りたいと願います。お祈りをお獻げ致します。

主なる御神さま、礼拝の御恵み、主イエスの御言葉を共に与えられまして心より感謝致します。世の状況を思い、終末的と思えるような悪しき力の働く世にあって、私たちの教会に為すべきことを表してください、深く

感謝致します。主イエスが御心を悟り、その愛の御心を覚悟を持って歩まれた道を私たちも辿る者とならせてください。

御子を送ってくださったあなたの愛を、私たちが、またこの世が深く悟ることができますように。力と権力と暴力が人々の命と生活と土地を破壊するような時にあって、教会に隣人愛を豊かに満ち、主の御恵みの業を流れさせてくださいますように願い祈ります。すべての教会を主が強めてください。

信濃町教会の歩みを主に感謝致します。教会を牧される佃先生のお働きを主が御手をもって支え、連なる教会の一人一人に、御恵みが豊かに開かれますよう心よりお祈り致します。

これらの祈りを、尊きわれらの救い主イエス・キリストの御名によってお献げ致します。アーメン。

讃美歌:409「すくいの道を」

献金・感謝(田崎友明)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

天にまします父なる神さま、主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦されましたことを感謝致します。説教を通して豊かに御言葉を与えてくださりまして感謝致します。私たちがこの一週間を、それぞれの旅路の中で御言葉を糧として歩むことができますように、お導きください。

今、世界におきましては、暴虐なる者たちによってあまりにも多くの人たちが苦しめられ、殺され、痛めつけられ、病の中にあって、食べるものもなく、この世の地獄と言っても差し支えないようなことが全世界を覆っておりますが、どうかそのような中にあって、あなたのお力によって、その人たちの痛みと苦しみをことごとく取り去っていただけますよう、切にお願い致します。涙を流す人たちのその涙を、目からあなたが拭い去っていただけますよう、伏して御前にお願い致します。

私たちは、必要なものを与えられ、主の僕として生きることが赦されておりますことを、ここに感謝致します。今、それぞれが与えられたものの中から、感謝と献身の印を御前にお献げを致します。どうぞ祝して教会の御用のためにお用いください。主が教えてくださいました主の祈りを共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讃美歌 90「主よ、来たり、祝したまえ」

祝福:主は言われます。「平和のうちにこの世へと出て行きなさい。主なる神に仕え、隣人を愛し、主なる神を愛し、隣人に仕えなさい」。主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しい交わりが、あなた方一同と共に、また私たちが心に留める一人ひとりの上に、限りなく豊かにありますように。アーメン。

報告:(1)会員逝去; 4/21(火)日、高橋恭子さんが召天された。100年の地上でのご生涯。(2)会計:月定献金封筒の献金者名未記載が2件発生、心当たりは会計迄。(3)100周年記念事業:出版物2点頒布の案内、(4)管理:エントランス天井落下物対応現況、修繕を要する正面玄関ドアの当面取扱注意。

後奏:「天にいます我らの父よ」(J.S. バッハ)

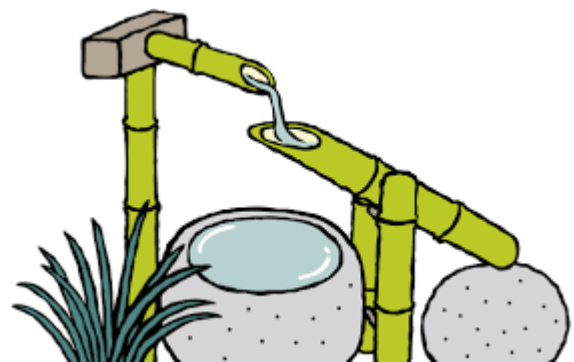


イラスト: 鹿威し